林野火災 事例 1

林野火災に出動し、夜間、道幅が狭く険しい山道を走行中、進行方向修正のためハンドルの切り返しを行おうとした際、周囲が暗く道幅がわからなかったため脱輪し、崖下に転落しそうになった。

結果	負傷無し

対策

なるべく広い場所を探して、進行方向を修正する。
崖地に面する場所、地面が軟弱な場所を避けて進行方向を修正する。
進行方向を修正する際には、車両の前後左右に誘導員を配置し、夜間には照明機材を活用する。

林野火災 事例 2

林野火災に出動し、山頂付近の急傾斜地の山林で可搬式散水装置を背負い残火処理をしていた際、急斜面で足もとが悪い上に重量物を背負っていたため、上方から転がり落ちてきた切り株を避けきれず、顔面、頭部に当たり転倒した。

結果	顔面打撲、むちうち症

対策

急傾斜地では、岩石や倒木が落下してくることを想定し、退避するための場所又は立木等を見込んで活動する。
可搬式散水装置の水量を容易に行動がとれる量とし、補水のための簡易水槽を現場付近に設置する。
監視員を配置する。

林野火災 事例 3

山林火災に出動し、急傾斜地で可搬式ポンプを４人１組で水利位置へ搬送していた際、１名が足を滑らせ転倒し、可搬式ポンプを足の上に落としてしまった（安全靴をはいていたため足の負傷はなし）。

結果	手部切創

対策

傾斜地で可搬式ポンプを搬送する場合は足場が悪いため、急がず、慎重に全員で連携して搬送する。
搬送する距離によっては、適宜、持ち手や団員の位置を入れ替えるほか、交代要員を配置する。

林野火災 事例 4

林野火災に出動し、竹林火災現場で筒先担当員として放水作業に従事していた際、放水圧力が高まりすぎ、管鎗の保持が困難となり放してしまった。

結果	負傷無し

対策

筒先の保持は、活動の安全性のため必ず２人以上で行う。
機関員がポンプの位置と筒先の位置との落差、距離によって適正な圧力で送水するために送水圧力の換算表を作成し常備する。
筒先員と機関員の連絡手段として、無線機、トランシーバー等を活用する。

林野火災 事例 5

林野火災に出動し、起伏の激しい広範な現場でジェットシューターによる消火活動中、出動した団員が少なく、1人の活動範囲が広く、かつ活動時間が長くなり、十分な休息と水分補給ができなかったため、脱水症状を起こしかけた。

結果	熱中症

対策

林野火災は広範囲にわたる場合があり、活動が長時間にわたるため、飲料水や食料を補給する体制を早期に調える。
交代要員を確保し、適宜、交代させる。

林野火災 事例 6

林野火災に出動し、現場付近でホース延長支援のため常備消防隊のホースレイヤーを用いてホースを延長していた際、資器材の取扱操作に熟練しておらず、また単独で操作していたため、上り坂でアクセルレバーを急激に回したとき、ホースレイヤーが勢い良く前進し、機械に引きずられて転倒しそうになった。

結果	負傷無し

対策

ホースレイヤー等、動力で駆動する機器は操作に熟練した団員が指揮者の命令で行う。
取扱者は、日頃からの訓練等で操作を熟知し、安全な運用に努める。

林野火災 事例 7

林野火災に出動し、山頂にて筒先担当員として、２名が交代で約１時間に渡り眼下の谷に放水していた際、風にあおられた炎が頭上を飛び、後方に新たな火災が発生し、退路を断たれそうになった。（管鎗、ホース等焼失）

結果	負傷無し

対策

林野火災では地形等の状況から、急に風向や風速等が変化することを想定して活動する。
一方向の火炎、焼失箇所にとらわれることなく、四方の状況に気を配り、退路を確保し、監視員を配置する。焼けた方向からの放水を徹底する。

林野火災 事例 8

山林火災に出動し、山間部を縫うように通るJR線の軌道に沿ってホースを延長していた際、見通しが悪かったためディーゼル機関車の接近に気づかず、約50㎝脇を機関車が通過した。

結果	負傷無し

対策

軌道付近で活動する場合は、速やかに最寄の駅に連絡し、列車の停止措置を講じる。
軌道から安全な距離を保つ事を徹底し、軌道に沿って監視員を配置する。

林野火災 事例 9

山林火災に出動し、火災現場付近の県道で連絡担当員として伝達を行っていた際、夜間で気温が下がっており、放水した水で路面が凍結し、転倒しそうになった。

結果	負傷無し

対策

アスファルト路面のアイスバーンは避け、砂利、土等の路面を選んで走行する。やむを得ずアイスバーン状の路面を走行する場合は歩幅を狭くして一歩ずつ踏みしめるように走行する。
応急処置として、靴底（土踏まず）に荒縄を巻くことも一考。